

## 種を播いたのは誰なんだ？

昭和の終わり頃、麦の収穫後、麦稈をロールにしていただいた関係から酪農家と牧草の更新後の播種について話が盛り上がった。私は牧草の播種は春に行なうものだと、その時まで思っていた。事実は乾燥して発芽揃いが悪い4〜5月をずらして雨が多くなる秋麦と同じ8月下旬以降に播種作業を行なうと聞いた。

その時、私の未だ活性化されていなかった睡眠中の脳の一部に**電灯マーク**がついた！普通であれば春小麦は雪がなくなる4月上旬に播種作業が行われるのが普通だ。もしそれを前年に播種したら収穫が増えるのではないか……？

春小麦の需要は当時からとても高かった（現在では秋小麦の2倍以上の価格で流通している）。ただ一番の問題である収量が極端な場合、秋小麦の半分にしかならない。そこで生育期間を長くして成長を促そうと考えた。

完璧に大脳が成長しきれていなかったもので、専門家に相談することにした。

私は当時から地元にある道立農業試験場には出入りしていたものの、そこにいるセンサーたちは理論武装については素晴らしいのだが現場の

ことには「？」が付き、今いち敷居が高く波長が合わない人たちだったので、どうしようか迷っていた。

ちょうどその時、農業試験場の隣に民間の北海道グリーンバイオ研究所ができて、当時の影浦開発部長（のちに副所長）とお会いする機会ができた。

影浦部長は農業の現場のことを良く理解されていて、春小麦の前年播種にとっても興味を持っていただいた。

さすが研究者だけあって、ただ秋に播種するのでは意味がないので、9月、10月、11月の3パターンに播種に分けてそれぞれ3年間試験した。その結果9月、10月に播種した場合、播種年の生育は秋小麦並みの見栄えになるが、越冬した春には50%の確率で物理的に消えてなくなることが分かった。原因は秋小麦の様に雪腐れの抵抗性がないと言うことらしい。

たぶん今の時代であつたら雪腐れ抵抗性の遺伝子を入れればGM春小麦ができる。GMでなくても雪腐れ抵抗の品種を用いた既存の育種開発

## 秋播き冬播き左巻き

Vol. 7



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆600haを作付けする。大学を1カ月中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約8000万円。

Illustration by Kazushige Akita

も可能であろう。そこで影浦部長は11月の根雪直前に春小麦を播種して雪の中で発芽させ、春の融雪時には発芽している環境が一番良いということも明らかになった。現在、その栽培方法はフロストシーディング、または初冬播き栽培として北海道で奨励されている。

私も試行錯誤の日々ではあったが、初冬播き春小麦を3年ほど栽培して

オレにも  
言わせる!

北海道長沼発  
ヒール宮井の憎まれ口通信

みた。その後、大豆の生育中に秋小麦を散播するやり方が普及してきたため、初冬播きは15年間行われなかった。

平成5年頃から札幌の隣町、江別市の片岡氏を中心とした農家がこの初冬播き栽培を導入して評価を受けていると聞き及んでいたが、自分には関係ないと思いきや、近隣農家の立場でいた。

平成16年7月に片岡氏の住む町、江別市で小麦サミットなる催しものがあり、200名くらいの農業関係者が集まり、一参加者として拝聴していた。司会の農業試験場のS氏がこの初冬播き栽培の歴史について解説していたが、事実関係と違うことを話していた。このS氏は、いかにも我々農業試験場と片岡氏がこの技術を開発したくらいのことを自慢していたが、その場に私がいたのが運のつきだった。

私は挙手して「今発言されたことは事実と違う、この私と北海道グリーンバイオ研究所の影浦部長が進めてきたことだ」と発言した。司会のS氏は黙ったままであったが、右足をマッハ1の速さで貧乏ゆすりして、何かいらだっているのが伝わった。ここで同じく江別市の●シリ食品の部長がこのように発言した。「誰が最初に考えて作ったかは問題

ではない。それを普及させたことが重要だ！」

ハンカクサイ（アホと言う北海道弁）連中だ。

この会議にもうひとつ重要なことが冒頭で議論になった。それは中部地区（名古屋）の豆腐業者が来道され、新技術の開発や発明などの知的所有権について発言された。江別市の●シリ食品のアホ部長は、せっかく中部から来ていただいたお客様の前で、北海道における知的所有権の認識のレベルの低さを露呈させてしまったのだ。

もともと北海道の豆腐、納豆業者は道産（国産）大豆を使用する割合が他府県よりも著しく低い。一番の理由は消費者の所得が低いことや、製造販売会社の資本力の低さにある。この会社も例外ではない。

北海道には自分自身では気がつかない共産主義者が多く存在する。

司会のS氏の態度や●シリ食品の部長の発言から読み取れるのは「農家は賢くなる必要はない、だまって農産物を作っていればいいんだ！」ということにほかならない。あとで聞いた話だが、江別の農家・片岡氏は、「自分が最初に初冬播きを始めた」とは発言していないそうだ。つまり**行政が勝手に**祭り上げた偶像なのだ。

ちなみに、この初冬播き技術はマグレで普及したのであるのか？ 影浦部長によると100年前のロシアでビートの種子を同じく初冬には播種する技術があったそうだ。

## 小さな親切、大きなお世話

先ほども簡単に述べたが、時を同じくして、大豆の生育中の9月上旬に小麦を散播する（秋播き小麦）技術が普及した。私は隣の南幌町で小豆の生育中に小麦を散播する話を聞き、大豆の場合でも応用できるのではないかと考えたのだ。

問題は播種の時期と播種量である。葉が生育している9月上旬が一葉安定して発芽することは隣の経験から知っていたが、播種量はドリル播きより多くするべきかどうかで悩んだ。現在では20年前の1反あたり15kgから8kgに落としても問題はないことは実証された。しかし、とてもおかしなことがあった。

またもや農業試験場がしゃしゃり出てきたのだ。それもイラストつきで解説書を配布したのだ。

この書類には播種量は1反あたり18kgから20kgが必要、とあった。それも私の住む地区の農家と協力してその数値を出したと記載されていた。初めて散播する者からも相談を受けたが、私の言う数字を信じない

で、農試がいうところの、私よりも50%多く播種する方を選んでしまった。なぜ最初に実施した私の意見も聞かずに試験をしたのか？ その結果、彼の秋播き小麦は翌年収穫時には全面積倒伏しまったのだ。

私が正しいと言うよりも行政の言うことを信じるくらいに無垢な農家をだます連中は誰なのか？ 素直に私に技術内容を聞いていればこのような事にはならなかったのだ。それくらい私は嫌われているのか？ まったく微笑ましいかぎりである。

播種量が50%増えれば種子代金も50%増えるのである。そんな**計算もする**など誰かが言っているのかもしれない。

秋播きを始めたことで得られたのは、播種作業の効率が著しく上がったことである。50haを従来のやり方でやるとすると、耕起2回、播種、土壌処理で1週間は必要だ。一方、散播だと速度運動式のブロードキャスターを用意して播種、掃除のみ。わずか2日で終了。コスト計算すると10倍は違う。

実はこのやり方1997年にアメリカ、ミシガン州に行った時に、日本と同じ1990年ころから当地でも実施されていることがわかった。これって同時多発する、1001匹目の猿現象ってやつですか？